

在朝鮮日本人画家とツーリズム¹

——加藤松林人を中心に——

喜多恵美子

1. 序 章

植民地期の朝鮮に住んだ日本人画家はいかなる眼差しを朝鮮に向け、いかに振る舞っていたのか。京城府が発行していた広報誌『京城彙報』に1940年7月から9月にかけて連載された「都市美座談会」を見ると、興味深いやりとりが展開されている²。この座談会は総督府によって告示された「風致地域ならびに公園計画」を契機に京城の美化について語り合おうという目的のもと、1940年5月6日に京城の半島ホテルで開催されたものである。

招待された参加者は美術家、文人、大学教授ら当代朝鮮を代表する知識人計19名である³。このうち美術家としては山田新一、遠田運雄、日吉守、松田黎光、加藤松林人、堅山坦ら、当時の朝鮮を代表する顔ぶれがならんでおり、朝鮮人画家としては金殷鎬、李象範という実力派の名前が挙げられている。1940年といえば内鮮融和や皇民化政策のひとつの頂点として創氏改名が施行された年である。座談会にはこの他、兪鎮午、鄭寅燮といった朝鮮人の文人たちも参席しており、特に李光洙が香山光郎の名前で参加しているのが目をひく。

冒頭のあいさつにおいて、主催者側の高橋京城府尹が「我々の郷土である京城を住み良いところにしよう」ということを述べているが、この座談会に一貫して見て取れるのは朝鮮に在住している日本人にとっては「朝鮮」が決して異国ではなく、もはや日本の一部であると認識されている事

実である。この座談会の中でも最も多く発言している洋画家の山田新一は京都市内に「乞食」が多いことに対して「あれは国力を疑われる場合がある」と述べるくだりがあるが、そこに見られるのも日本の国威が毀損されることに対する憂慮である⁴。

この座談会では単に建物やインフラの問題だけではなく、衣服やマナーについてまで広く議論されている。日本人参加者の発言をつぶさに見ていくと、朝鮮を「郷土」と呼び、朝鮮人列席者に対しても丁寧な態度で接しているものの、日本人の発言には朝鮮人に対する差別意識が内包されていることが見て取れる。たとえば動物園でカンガルーのことを鹿だと説明する朝鮮人女性がいたという事例に対して、山田新一が「(鹿のうえに)馬をつければよい(筆者註、つまり馬鹿の意)」と皮肉を交えて冷淡に言い放っているのだが、そうした発言を許す座談会の雰囲気からは、性差別的視点と同時に朝鮮人を劣った存在として疑わない日本人の傲慢さを読み取ることができる⁵。別の場面では、緑旗連盟の津田節子が女性の朝鮮服を礼賛するのを聞いて、洋画家の遠田運雄が意味ありげに笑いながら「朝鮮服を着たことがあるが損です」と言っている。みとがめた鄭寅燮にその理由を問い詰められても遠田は笑ってごまかすばかりであったが、とうとう鄭寅燮に「朝鮮服を着ていると朝鮮人だと見下げられるから損だといっているのではないか」と看破されるにいたっている⁶。

このように表面的には「一視同仁」「内鮮融和」を謳いながらも、心の中では朝鮮人を見下すダブルスタンダードが日本の朝鮮支配の根底にあり、差別意識は隠さなくてはいけないものであると認識されながらも、それをちらちら見せることで日本人としての優位性を担保させようとしている点が特徴的である。

この座談会で発言しているのは、参加者のごく一部である。本稿で扱おうとしている日本画家の加藤松林人はここでは何も発言をしていない。おそらくは編集によって取捨選択が行われているはずなので、発言はしていても活字になっていないだけの可能性も大いにある。しかし、この加藤の

沈黙は少し不自然にうつる。

加藤は、山田新一のように東京美術学校出身の権威もなければ、画壇で力のある師のもとで学んだわけでもなかったにもかかわらず、植民地朝鮮を代表する画家として必ず選ばれてきた。植民地解放後も、韓国と日本の国交正常化の直前に韓国政府から国賓として招かれた最初の日本人の一人となった⁷。座談会ではまるで沈黙を守っているかのように見える加藤であるが、その活動を振り返ると絵画制作だけではなく言論活動も旺盛であり、早い時期から多数の新聞雑誌に寄稿し、未発表の手記も相当数ある。加藤が書き残したものには、朝鮮の美術や文化を学び、朝鮮人とつきあっていくべきだという考え方が披歴されており⁸、帰国後も、在日朝鮮人に積極的に関わろうとしている。その姿勢は上記の座談会における他の画家たちのそれとは対照的に見える。

加藤にとっての朝鮮とは、画題となる山河の美しさに加えて、画家としての経歴が皆無に等しかった自分にも活躍の場を与えてくれたありがたい存在だったはずである。加藤が早くから活躍できた背景には、日本のしがらみから解放された人的交流と朝鮮内における交通網の整備とが少なからず関係している。さらに、当時ツーリズムとジャーナリズムの発達が相互効果をもたらし、画家がになうべき仕事の範疇が拡大したことも考え合わせなくてはならない。鉄道に乗って京城と地方との間を往来し、その経験を絵画作品と文章とで表現することができた加藤の行動力と器用さは植民地朝鮮のジャーナリズムからは重宝されたと思われる。

本稿では加藤松林人が当時の他の画家たちとは多少異なる側面もっていたことを前提にしつつも、ネットワークとツーリズムという軸を中心に在朝鮮日本人画家がどのように活動をしていたのか、その特徴について考察を加えたい。

2. 加藤松林人と『金剛山探勝案内』(1926年)

加藤松林人は1898年9月徳島県の阿南市で生まれた。本名、加藤俊吉、

1915年、徳島県立富岡中学校を4年で中退した年に上京して早稲田大学文学科予科に入学、2年後の1917年9月に予科を修了している。1917年は加藤にとって大きな転機の年であった。19歳という若さにもかかわらず、8月に長野県出身の「なつ」という女性と結婚しており、11月には母と妹を連れて父が住んでいた朝鮮に移住しているからである。

彼は京城移住後、清水東雲門下に入ったことで画家として活動するようになったと認識されてきたが、本人の記録によると1911年に入学した富岡中学校に美術教師として在籍していた東京美術学校出身の大東昌可によって「真の写実を教わった」とあり、日本にいた頃から美術に関心をもっていたことがわかる。また、1915年、早稲田大学の予科に在籍していた頃、谷中にあった太平洋洋画研究所に1年近く通って、デッサンと油彩の初歩を学んだという⁹。つまり、加藤の美術修業は日本画ではなく「洋画」から始まったのである。彼の作品の中には日本画とも洋画ともとれるような構図や筆致のものが少なくないのは、こうした事情も関係していると考えられる。

加藤が清水東雲の門下に入ったのは、朝鮮に渡って3年たった1920年3月のことであった。画室の表札を見ていきなり飛び込んだというから、かなり思いつきに近い形で日本画を学び始めたことになる。「日本画というものをやって見たいという当突^{ママ}な」加藤の希望に対して、清水東雲は日本画の技法だけでなく材料の種類やその扱い方、表装の仕方といったことまでを一から手ほどきをしたという¹⁰。それは趣味の域をはるかに超えた専門的な内容であり、本来画家を支える側の表具屋や絵具屋の仕事まで教えてもらったことは、朝鮮で画家として独り立ちするのにたいへんに役立ったと思われる。3年後、1922年に朝鮮美術展覧会（以下、朝鮮美展）が開設されたおりに、〈秋江揺落〉と〈冬の夕暮〉という作品を出品し、入賞こそしなかったものの、これらの作品によって加藤は注目をうけることになった¹¹。

履歴書にも触れられているが、彼は取材をうけるだけではなく、あちこ

ちの新聞や雑誌に寄稿する文筆家でもあった。彼の最初の著書は、1926年に亀屋商店から発行された松本武正との共著『金剛山探勝案内』であった(写真1)。この本は植民地期に発行された数多の金剛山案内書のひとつとしてそれほど重視されてこなかったが、植民地朝鮮を考える上でさまざまなヒントを与えてくれるものである¹²。

本の構成は、「金剛山系」「旅の準備」「内金剛」「新金剛」「海金剛」「外金剛」「帰途」となっており、全体で118ページである。加藤は挿絵や装幀だけではなく、本文執筆も大部分担当したようだ¹³。導入部分において、金剛山は古くから知られた山であり、華嚴経にその名の由来をもつ仏教の聖地であること、近世では文人墨客が足しげく訪問した山であったことを紹介しつつ、1894年にイザベラ・ビショップ女史によって踏査されたことをきっかけとして、「今、私たちの前に全く新しく壮大なる印象を以て現れた」と述べている。これは言い換えると、西洋式の山岳観光の概念を通じて、壮大な景観を誇るツーリズムの聖地として金剛山が再認識された



写真1 『金剛山探勝案内』

ということを意味している。

このような金剛山探訪の意味転換の背景には、朝鮮鉄道局の経営と宣伝とが大きな役割を果たしているということにも言及されているが、このようなツーリズムは都市整備と都市と観光地を結ぶ鉄道敷設とその延伸、そしてなによりも「観光」という消費活動が可能な都市市民層の成長が不可欠であった。この本では、「内外金剛周遊十日間 旅費概算六〇円…一〇〇円」「内外金剛周遊六日間 旅費概算五〇円…八〇円」「外金剛探勝三日間 二五円…四五円」「内金剛探勝三日間 三五円…四五円」といった4つのモデルプランが提案されており、旅に必要な服装、携帯品、食糧についても詳細な解説がある¹⁴。いずれのコースも京城駅を起点としたものだ。

この『金剛山探勝案内』が発行された時、加藤は28歳である。履歴書を見ると1923年25歳の時、第二回朝鮮美展で三等を受賞した〈黒扇〉という作品が100円ほどで宮内省に買い上げられたことが転機になり、絵画制作に本腰を入れることを決意するようになったとあるため¹⁵、この本が画家としての自覚をもって書かれたものであることがわかるのだが、それにしても日本画家としての経歴も浅い若者がここまで認知され活動できたのは、彼が京城で構築した人的ネットワークが少なからず影響しているといえそうだ。第二回朝鮮美展以前は、「碁を打ってみたり、短歌の雑誌に熱中したり、(略) そうかと思うと毎日毎日、京城近郊のあらゆる山や川、小さな部落、山腹に喰ついたような寺や庵、また旧市街の狭い通りの小路の隅々に至るまでスケッチブック片手に」歩き回っていたとあるが¹⁶、同時にこの頃加藤は多岐にわたる知的好奇心によって人脈を作っていたのである。

加藤は短歌の同人『ポトナム』に投稿したり¹⁷、多田毅三と内野健児が発行した総合芸術雑誌『朝』の創刊に関与してきていることが知られているが¹⁸、こうしたことから、もともと美術に限らず広く文化的なことに関心があったこと、人と積極的に交流する外向的な人物だったことがわかる。『金剛山探勝案内』の共著者である松本武正はもともと平壤日日新聞



写真2 松本武正

の記者だったが¹⁹、筆禍事件に巻き込まれて投獄されており²⁰、その後大正6年(1917年)春に京城に移住してきた人物である²¹(写真2)。彼が京城に移住してからは朝鮮新聞に掲載した随筆は『漢京一年』という単行本として発刊され、そこに多くの友人知人からの賛辞や書面が寄せられている²²。総じて松本の文才は高く評価されており、捲土重来を期待する内容が中心となっていて、松本は新聞記者仲間からの人望はもちろん、政治家や言論人、文化人など幅広い人脈をもっていたことがわかる。この松本との出会いが加藤にとってもうひとつのターニングポイントになったようだ。次章では、ジャーナリズムを介して京城の文化人と政財界との間に構築された緩やかなネットワークの一例について見てみたい。

3. 『京城雑筆』とその周辺の人々

もともと加藤と松本が会うことになったのは、朝鮮の将棋界育成のために当時京城に住んでいた棋士の溝呂木光浩七段の黄金町(現在の乙支路)

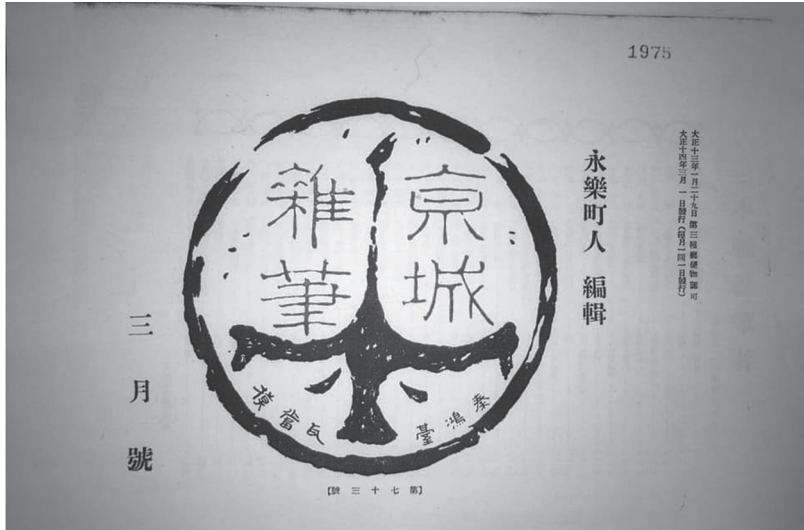


写真3 『京城雑筆』

の家であった。加藤によればこの時は松本が本格的に京城に移ってくる前であったということなので²³、加藤自身も京城に定着してまもなくの頃であったといえる。以来、加藤は松本のことを「松本先生」と呼んで週に一度は会っていたという²⁴。

松本は京城で『京城雑筆』という雑誌の主筆を永楽町人の筆名でつとめ(写真3)、執筆者としては『京城日報』、『京城日日新聞』といった新聞の記者仲間や雑誌『朝鮮及朝鮮人』主筆が組織の枠を超えて寄稿している。さらには朝鮮総督府の官僚、学校教員、東洋拓殖株式会社、殖産銀行関係者といった植民地経営に関わっている人々はもちろん、百貨店や物産会社、個人商店主といった商業人、仏教関係者やホテルの支配人までが名を連ねているのを見ると、松本の広い人脈に驚かされる²⁵。

加藤もまた『京城雑筆』にしばしば記事を書き²⁶、加藤の絵画頒布会の後押しを京城雑筆社がすることもあった²⁷。大正13年(1924年)頃だと、加藤と高木背水が交互に記事を寄稿しているのが目を引く。洋画家高木背

水は周知の通り、朝鮮の美術振興に注力し朝鮮美展創設の立役者であった人物である。弱冠 20 代の加藤が長老格である高木と肩を並べるようにして活動していたことは興味深い事実だ。

『金剛山探勝案内』に話を戻すと、発行元は本町二丁目に店を構える和洋酒食糧店「亀屋商店」である。「はしがき」において松本が次のように言っている。「亀屋主人進辰馬氏は、金剛山紹介の篤志家で、これまでとても、この山の為に随分骨を折って居られる。が、まだそれでも足りるとせず、簡明平易な案内書をというので、その編著を私達に託せられた²⁸」。亀屋商店は『京城雑筆』に常に広告を掲出しており、広告のみならず記事においてもその人となりで紹介されているため、名実ともに『京城雑筆』の支援者であったといえる²⁹。『朝鮮功労者銘鑑』を見ると、進は金剛山礼賛の第一人者として紹介されており、「今日金剛山が天下の名峰として世界的のものとなっているが氏の如き篤志家の努力与て力あり」と書かれている³⁰。1919 年に着手され 1931 年に完工した金剛山電気鉄道の敷設によって、内金剛までのアクセスが容易になり金剛山観光は大いに発展したが³¹、進辰馬は金剛山電気鉄道の社長久米民之助と協力しあいながら観光開発に貢献した人物なのである³²。

『京城雑筆』も、彼らの金剛山観光事業を後押しするかのように関連記事を頻繁に掲載している。大正 13 年（1924 年）7 月発行の第 65 号では高木背水が「金剛山に就いて」という文章を寄稿しており、「金剛山探勝は三度や五度往った位では真の妙味は決して解るものではないと悟って（略）土着して既に十年になるが未だ一枚も真の金剛山の景を画面に表し得ない。探勝の足の回数が五回が八回、十回、二十回と重なるにつけ美妙の深味と範圍が何度迄有るやら限り知られんと思ふ。再三再四探勝せられん事を諸君に切望す」と書いている³³。また、同じ年の 11 月発行の第 69 号では加藤が「金剛山たより」なる文章を書いているが、これは加藤が松本にあてた手紙と思しき内容で、高木背水とともに金剛山を探勝したことが書かれてあり、旅の臨場感にあふれている³⁴。

亀屋商店は金剛飴、金剛饅頭、金剛羊羹などの商品を開発して、『京城雑筆』に広告を載せ、その内容は年を追うごとに賑やかになっていった。亀屋主人は趣味と実益を兼ねていると評されたが³⁵、彼は金剛山に関わる書画を蒐集し、徳富蘇峰や橋本閑雪、志賀重昂らが詠んだ金剛山の詩を『京城雑筆』で紹介し、はては詩集まで出版している³⁶。金剛山のすばらしさを世界に知らせたいという亀屋主人の思いには、朝鮮をわが土地として見なしているからこそその情動が強く作用しているといえる³⁷。

このように、松本武正が提供した『京城雑筆』という「場」を通じて、人々は直接間接的につながりをもち、編集者としての松本は各領域を有機的に連携させるような誌面作りを意識していたように見て取れる。その一例として挙げられるのが、金剛山をめぐる一連の記事である。各界人士による記事を一定期間印象に残るように掲載することによって文化芸術と観光事業とのつながりを可視化させ、多額の資金を投資できるパトロンとしての進辰馬も『京城雑筆』誌上で存在感をたかめた。進は鉄道を開通させて金剛山へのアクセスを容易にし、加藤の最初の著作『金剛山探勝案内』を世に出させたが、その案内書にしたがって金剛山を訪れた人々がまた寄稿をするというサイクルが成立するのである。

京城の日本人ネットワークは、規模は小さかったものの、その分知識人や文化人が官僚や財界人とすぐにつながることができた。その媒介役として少なからぬ働きを見せたのが松本をはじめとするジャーナリストたちであった。また、こうした在朝鮮日本人の相互連携は、各自の専門領域外の活動によってゆるやかに形成されていったことも特徴的である。画家となつてわずか数年の加藤青年が活躍できたのも彼の関心が美術にとどまらず、将棋や文学など多趣味であったことによって、松本や進のようなキーパーソンと出会い、その有形無形の後押しを受けたからなのである。

4. 『朝鮮八景』展

第二回朝鮮美展で三等入賞、第三回展で三等主席と入賞を重ねていった

加藤は、東京の官展にも出品することになり、昭和2年(1927年)の第八回帝展では〈晩秋の関帝廟〉が入選するにいたった。この前年の第七回帝展では結城素明に師事していた金殷鎬が入選していたが、金や加藤の入賞を見た結城素明は「良かったなあ、これで漸く朝鮮も一人前になったなあ」と、とても喜んで祝ってくれたという³⁸。加藤は、この頃から「内地」の展覧会へ精力的に出品し、日本の画壇にも認知されるようになっていった。加藤は、1935年第十四回朝鮮美展で永久無鑑査となり、1937年第十六回朝鮮美展では「参与」資格で審査に立ち会うことになったが、これが彼の画歴のひとつの頂点となった。

加藤が朝鮮を代表する画家として認知されるようになったことを示すもうひとつの例として、『大阪毎日新聞』に「朝鮮八景」の風景画製作を依頼されたことを挙げるができる。この「朝鮮八景」とは、1935年に『大阪毎日新聞』が「施政二十五周年祝賀記念事業」として朝鮮半島の16の景勝地を選定し、一般投票によって八景八勝を選出した行事である³⁹。いうまでもなくこれは、1927年に同じく『大阪毎日新聞』が実施して好評を博した「日本新八景」の朝鮮版である。米家泰作によると、「朝鮮八景」選定には「郷土愛」を喚起する側面と、朝鮮の景観を「帝国」の中に位置づける、いわばコロニアル・ツーリズムの発展を期待する側面があったと指摘されている⁴⁰。

『朝鮮八景』選定は1927年に『京城日日新聞』が、1929年には『三千里』がそれぞれ実施してきたが、『大阪毎日新聞』が実施した1935年の選定では、朝鮮を代表する画家たちの手になる「朝鮮八景八勝画展覧会」が開催されている。この展覧会への出品を加藤は要請されたのである⁴¹。

1936年1月31日付の『大阪毎日新聞』に掲載された「半島画壇の八氏が八景八勝画展」という記事を見ると以下のように書かれている(写真4)。「風光朝鮮の選定第二周年を迎えた本社京城支局では半島画壇の群雄としてその彩管を謳はれる画伯八氏に依頼し「朝鮮八景八勝画展覧会」を開催することにいたしました。支局主催のこの企てに欣然参加した諸士はいつ



写真4 『大阪毎日新聞』1931年1月31日付

れもその将来に自信と抱負とを持つ半島傑出の闘士ばかりで、一人一景一勝を受持ちすでに厳寒を衝いて昨冬から勇躍目的地にスタートしました。各自が藝術の心根を一管の筆に託してカンバスと絹地に描き出される作品は確かに絢爛たる傑作に相違ないと信じます、天下不朽のこの作品を集めて、桜花ほころぶ三月二十一日から五日間、京城三越ギャラリーにおいて八景八勝展を開催いたしますが必ずや半島民衆の絶賛を浴びるものと期待されています。」

作品制作を要請された画家とそれぞれが担当し描いた八景八勝は以下の通りである。

洋画部門

- | | |
|------|------------|
| 遠田運雄 | 閑麗水道、海雲台 |
| 村上美里 | 内臟山白羊寺、統軍亭 |
| 山田新一 | 濟州島漢拏山、牡丹台 |

三木弘	赴戦高原、邊山半島
日本画部門	
加藤松林	智異山、朱乙温泉
堅山坦	海印寺、扶余
宇野逸雲	俗離山、妙香山
松田正雄(黎光)	慶州仏国寺、夢金浦

八景八勝の候補地からは、金剛山はすでに世界的に有名な景勝地であるという理由から最初から外されており、白頭山が候補に挙げられていないのは、一般観光客が訪れるには交通の便がよくないという理由からのようである。選定条件のひとつに「鉄道各駅から交通の便のある名勝地に限る」とあり、ツーリズムへの期待が最初からおりこまれた行事であったことがはっきりしている⁴²。

展覧会初日は大盛況であり、2万人もの観覧客が押し寄せた。出品点数は78点、三越百貨店5階のギャラリーが展覧会場であったが、4階では朝鮮観光協会主催のみやげ展覧会が同時開催された。宣伝の方法としても地元の各新聞にピラ数万枚を折りこみ、京城府内の関係者と各地の保勝会に4千枚の招待状を出したという。また、3月24日からは出品作家の文章と作品を紹介する「八景八勝めぐり」という連載が『大阪毎日新聞』紙上で始められていて、加藤は連載第2回で文章を寄稿している。これらの記事は、観光案内的な視点が明瞭であり、朱乙温泉に関しては「この山と溪流と温泉を打って一丸とする便利な探勝コースの出来上る日が朱乙の新らしく生まれかはる日でありませう」と言及している⁴³ (写真5)。

展覧会は3月25日までであったが、4月10日から『大阪毎日新聞』紙上で八景八勝展の画家たちの作品が6回にわたり紹介されている⁴⁴ (写真6)。これは1936年4月10日から5月31日まで兵庫県西宮市で開かれた『大阪毎日新聞』主催の「輝く日本大博覧会」において「朝鮮館」が設置され、そこで「八景八勝」が大々的に紹介されたことと密接な関係がある⁴⁵。「八景八勝」選定後の一連の報道と行事の特徴は、なんといっても視覚的



写真5 加藤松林人
「智異山と朱乙」記事

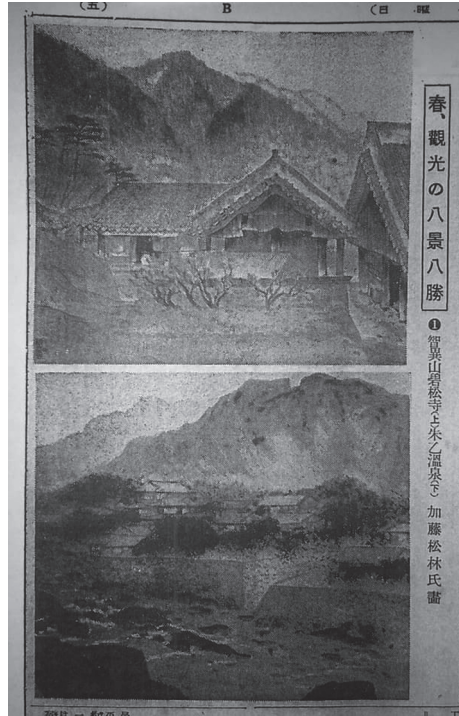


写真6 加藤松林人
〈智異山碧松寺〉〈朱乙温泉〉

媒体を複合的かつ効果的に使用して、時間と空間を交差する連携線を作り上げ、朝鮮と内地をつなごうとしている点にある。そうした視覚媒体はツーリズムをはじめとする「消費行動」への欲望を刺激した。1936年5月16日付の『大阪毎日新聞(朝鮮版)』が、京城の三中井百貨店で「朝鮮八景ゆかた」が販売されたことを報じていることは象徴的である(写真7)。目の前の「八景」は商品として手にすることができる「もの」として認識されるようになっていくのである。

文化活動とジャーナリズム、ツーリズム、コマースリズムとの結合は現代から見るとなんら目新しいものではないが、「朝鮮八景」の場合、こ

活動を見てきた。

加藤の活動形態は大正期に活動を開始した画家にふさわしく、人脈と印刷媒体、そして当時整備されつつあった交通網を十全に活かしたものであったという点で特徴的であった。その姿は、画室に籠って作品制作にだけ集中しそれ以外は無頓着、といった既存の芸術家像とは異なるものである。加藤は在朝鮮日本人ネットワークから有形無形の支援を受けてきており、彼の活動は時代的な背景に加えて、植民地朝鮮であったからこそ可能であった側面もあった。人脈に推されて実力をつけていき、ここで見てきたように金剛山観光や「朝鮮八景」のような植民地ツーリズムとも関わるようになっていくのだが、その一方で加藤自身は極めて真摯に朝鮮の風景のすばらしさを日本社会に知らしめたいと考えていたことも指摘しておかなければならない。

実際に彼は自分の眼で見た朝鮮の風景を熱心に画幅におさめ、金剛山を訪れようともしないで作品を描く画家を冷笑的に見ていたりもした⁴⁷。戦後、加藤が制作活動を再開するきっかけとなったのは、在日朝鮮人が発行した『新世界新聞』であったが、彼はそこで朝鮮の風景を多く発表しており、1958年に発行した『朝鮮の美しさ』という本においても、絵と文によって朝鮮の風物を叙情的に紹介している。解放後、韓国の国賓として正式に招待された最初の日本人となったのは、この本のおかげだと本人は考えていた。

加藤も宗主国の人間であった以上は、帝国主義的な思考から自由になれない部分があるのはまぎれもない事実であるが、朝鮮美術史について自分なりに勉強をして文章化しようとしていたことや⁴⁸、帰国後、損得ぬきで朝鮮美術博物館を開設しようとしていたことを考えあわせると、他の在朝鮮日本人画家とは一線を画しているといえる。今後は、加藤が残した手記をもとに朝鮮人画家との交流についても考察していきたい。

註

- 1 本稿は、筆者が韓国美術史学会春季学術大会（2019年4月27日、韓国学中央研究院）で行った口頭発表「재조선 일본인화가와 식민지 투어리즘-카토쇼린진（加藤松林人）을 중심으로」を元に加筆修正したものである。
- 2 「都市美座談会（1）」『京城彙報』224号、1940年7月、「都市美座談会（2）」『京城彙報』225号、1940年8月、「都市美座談会（3）」『京城彙報』226号、1940年9月。
- 3 座談会参加者は以下の通り。山田新一（洋画家）、遠田運雄（同）、日吉守（同）、松田黎光（日本画家）、加藤松林（同）、堅山坦（同）、金殷鎬（同）、李象範（同）、浅川伯教（工芸家）、五十嵐三次（同）、香山光郎（文人）、兪鎮午（同）、鄭寅燮（同）、辛島驍（城大教授）、津田節子（緑旗聯盟）、宋今旋（梨花女専教授）、加藤灌覚（総督府嘱託）、岡田貢（京城府嘱託）、寺田暎（京城日報学芸部長）。主催側としては、高橋府尹、長郷工営部長、高橋内務課長、桃田都市計画課長、伊藤土木課長。『朝鮮彙報』224号、1940年7月、p. 23。加藤は号として、「松林」と「松林人」の両方を用いており、ここでは松林の名義で参加している。
- 4 「都市美座談会（1）」『京城彙報』224号、p. 23。
- 5 「都市美座談会（2）」『京城彙報』225号、p. 23。
- 6 「都市美座談会（2）」『京城彙報』225号、p. 25。
- 7 喜多恵美子「在朝鮮日本人画家加藤松林人の活動—自筆履歷書をめぐって—」『大谷学報』97巻2号、2018年、p. 53, pp. 76-77。
- 8 加藤松林人『回想の半島画壇』p. 55, p. 220, p. 390。
- 9 加藤松林人『履歷書』（本人自筆、1979年7月20日）。この『履歷書』全文については、喜多、前掲論文を参照のこと。
- 10 加藤『履歷書』。
- 11 「鮮展に何を出す？—幾枚でも描いて見ると元気の好い松林氏」『京城日報』1923年4月11日付。
- 12 植民地期の金剛山案内書としては以下のものがある。竹内直馬『朝鮮金剛山探勝記』富山房、1913年；今川宇一郎『朝鮮金剛山大観』大陸踏査会、1914年；『金剛山探勝案内』朝鮮総督府鉄道局、1917年；『金剛山探勝案内』南満州鉄道株式会社京城管理局、1921年；『金剛山探勝案内』南満州鉄道株式会社京城鉄道局、1924年；『萬二千峰朝鮮金剛山』満鉄京城鉄道局、1924年；『朝鮮鉄道旅行便覧』朝鮮総督府、1923年；松本武正・加藤松林『金剛山探勝案内』亀屋商店、1926年；菊池幽芳『朝鮮金剛山探勝記』洛陽堂、1928年；吉田初三郎『金剛山真景絵図』1929年；吉田初三郎『金剛山真景絵図』1931年；前田寛『金剛山』朝鮮鉄道株式会社、1931年；菊池謙讓『金剛山記』鶏鳴社、1931年；『朝鮮金剛山：天下無比萬二千峰』日之出商行、1931年；岡本暎翠『京城と金剛山』京城真美会、1932年；大熊瀧三郎『金剛山探勝案内記』1934年；松浦翠香『金剛山探勝案内記』金剛山探勝案内社、1934年；『金剛山』財団法人金剛山協会、1940年。
- 13 松本武正「はしがき」（松本武正・加藤松林『金剛山探勝案内』亀屋商店、1926

年；以下『探勝案内』とする)

- 14 『探勝案内』 pp. 37-45. ちなみに大正 15 年 (1926 年) の公務員 (高等文官) の初任給が 75 円であったことからこれらの旅費が一般市民にとってもなんとかが届く金額であることがわかる (『値段史年表 明治大正昭和』朝日新聞社、1988 年、p. 67.)
- 15 加藤『履歴書』。
- 16 加藤『履歴書』。
- 17 加藤『履歴書』；加藤松林人「小泉さんと私」『ボトナム』34 (5)、1957 年、p. 13.
- 18 川瀬千春「植民地朝鮮における創作版画の展開 (2) — 京城における日本人の活動と「朝鮮創作版画会」の顛末 —」『名古屋大学博物館報告』No.31、2016 年、p. 32.
- 19 「次回四月의 当番幹事는 平日記者松本武正氏로定하였다더라」(「記者団第二例会」『毎日申報』1913 年 3 月 15 日) 松本武正と亀屋主人進辰馬については水野直樹京都大学名誉教授から多大なご教示と資料提供を得た。ここに記して感謝の意を表す。
- 20 「既報와如히有本弁護士의 平壤日日新聞主幹松本武正氏에 對한 名譽棄損事件의 第一回公判은 去二十四日午前十時半平壤地方法院에서 開廷하여、事實審問을 進行하였는데 更히 四月七日午前九時第二回公判을 開廷한다더라」(「地方毎日平壤」『毎日申報』1914 年 3 月 27 日付)。「有本弁護士名譽棄損에 依하여、平壤地方法院에서 罰金三百円에 処함을 被하였던 平壤日日新聞記者松本武正氏는 同判決을 不服하고、去二日平壤覆審法院에 控訴하였다더라」(「地方通信平日控訴」『毎日申報』1914 年 6 月 6 日付)。「町人、筆禍に罹って、平壤の獄に投ず。」児玉篁南「永楽町人を紹介す」(永楽町人『漢京一年』朝鮮新聞社、1918 年)。「永楽町人」は松本武正の筆名。
- 21 「大正六年春、漢京 (筆者註、京城) に入り。」永楽町人、前掲書、自序。
- 22 永楽町人、前掲書。
- 23 加藤松林「交友うつり変り」『京城雜筆』第 70 号、大正 13 年 (1924 年) 12 月、p. 9. 加藤は 1917 年 11 月に渡鮮しており、松本自身が 1917 年に京城に移住したと述べている内容と若干の齟齬が生じる。
- 24 加藤松林「松本先生」『京城雜筆』第 68 号、大正 13 年 (1924 年) 10 月、p. 36.
- 25 『京城雜筆』についての研究としては、이민희 「일문어 잡지 『경성잡필』로 본 식민 담론」『翰林日本学』Vol.29、2016 がある。
- 26 加藤松林「鮮展を前に」『京城雜筆』第 61 号、大正 13 年 (1924 年) 3 月、p. 7；「新義州から」『京城雜筆』第 66 号、大正 13 年 (1924 年) 8 月、p. 5；はじめ多数。
- 27 平田久雄「松林氏画会」『京城雜筆』第 73 号、大正 14 年 (1925 年) 3 月、p. 11.
- 28 松本武正「はじめに」『探勝案内』。
- 29 平田久雄「亀屋主人論」『京城雜筆』第 78 号、大正 14 年 (1925 年) 8 月、p. 42.

- 30 「京城に於ける実業界の元老として活躍した釘本、山口、古城氏等の没後、其の後を継ぎ朝鮮の発展に尽力してゐる人に進辰馬氏がある。氏は福岡の人、明治元年生れ、明治二十二年末松博士及伊藤博文公に私事する事数年後書籍出版を開始し、末松博士の著述などを出版したが、感ずるところあって渡鮮明治二十七年京城に居を定め、和洋酒食糧店を開業今日に及んでいる。氏は常に金剛山の壯観を賞し、探勝する事数回、之に関する書画を蒐集し、優秀なるものは復本して多くの同好の士に頒布する等金剛山礼賛の第一人者であり今日金剛山が天下の名峰として世界的のものとなつてゐるが氏の如き篤志家の努力与て力ありと云ふべきであらう。氏は齡古希に達せんとしてゐるが尚壯者を凌ぐ覇氣を有し朝鮮取引所監事朝鮮商業銀行朝鮮火災海上保險会社、京城水産会社其の他の事業会社に関係し、取締役若しくは監事として活躍して居り、常に公共的方面にも努力を怠らず種々なる名誉職をも兼ね、朝鮮の発展、朝鮮人の指導にも相当貢献しその功績見るべきものがある」『朝鮮功労者銘鑑』民衆時論社、1935年、p. 333。
- 31 金剛山観光の路線拡充については金炫淑「근대기 흥성 문화공간으로서의 금강산과 금강산 그림」『温知論叢』第35輯、2013、pp. 459-460.を参照のこと。
- 32 「朝鮮に光る一亀屋商店主進辰馬」『朝鮮新聞』昭和2年（1927年）2月10日付。
- 33 高木背水「金剛山に就いて」『京城雜筆』第65号、大正13年（1924年）7月、p. 8。
- 34 加藤松林「金剛山たより」『京城雜筆』第69号、大正13年（1924年）11月、p. 14。
- この他にも満鉄旅客係主任の佐藤作郎「金剛山漫筆」（第68号、1924年10月）、総督府鉄道局の久保田得三「金剛山国立公園論」（第77号、1925年7月）、朝鮮鉱業会の徳野眞士「金剛ハガキ便り」（第79号、1925年9月）、平田久雄「金剛如意記」（第81号、1925年11月）吉岡久「金剛山手記」（第92号、1926年10月）、長安寺ホテル支配人伊藤龍「長安寺村雜筆」（第92号、1926年10月）などがある。
- 35 注29平田久雄「亀屋主人論」、注32「朝鮮に光る」参照。
- 36 成田魯石『金剛句歌詩集』亀屋商店、1927年。
- 37 「君は金剛山の宣伝は対内地的にせず世界的にしたいといふ而して金剛山に登らぬ者は異端者の如く不都合呼ばはりをするほど熱心だ」注32「朝鮮に光る」参照。
- 38 加藤『履歴書』。朝鮮美展出品作家の帝展入賞としては、山田新一が大正14年（1925年）第六回帝展洋画部で入賞している。第七回帝展の洋画部では遠田運雄が入選したが、山田も遠田も洋画家であり東京美術学校の出身でもあるため、それなりに受け取られたが、朝鮮人の金股鎬の入選は大きな衝撃があった。彼らの入賞に刺激されて加藤も出品するにいたつたという（加藤松林人『回想の半島画壇』pp. 108-112.）。金股鎬が得意とした彩色人物画は日本画の主たる画題のひとつであるが、朝鮮の士大夫の価値観では重視されてこなかった分野だった。つま

り金殿鎬は日本画風の作品を制作することで評価されたわけである。しかしまさにこの点で彼は解放後の韓国で批判されることとなる。日本と朝鮮では同じように見える「伝統絵画」も成立や文脈自体まったく異なる。朝鮮の伝統絵画が日本画の価値体系に組み込まれることが朝鮮の発展につながるという日本側の発想自体が植民地史観に基づいたものである。

- 39 1935年の朝鮮八景選定については、以下を参照のこと。米家泰作「昭和10年の朝鮮八景選定—コロンIAL・ツーリズムの景観」金田章裕編『景観史と歴史地理学』吉川弘文館、2018年、pp. 266-297.
- 40 米家、前掲書、p. 295.
- 41 加藤の『履歴書』では、昭和5年と書かれているが、この次の年に二・二六事件があったと書かれてあるため、1935年と昭和5年を錯覚したものと思われる。喜多、前掲論文、pp. 62-63.
- 42 「朝鮮八景投票—施政二十五年祝賀記念事業」『大阪毎日新聞（朝鮮版）』1935年6月20日付。
- 43 加藤松林「八景八勝めぐり（2）—智異山と朱乙」『大阪毎日新聞（朝鮮版）』1936年3月25日付。
- 44 「春、観光の八景八勝（1）加藤松林画」『大阪毎日新聞（朝鮮版）』1936年4月10日付。その他の画家は宇野逸雲（4月11日）、松田黎光（4月14日）、堅山坦（4月15日）、遠田運雄（4月16日）、村上美里（4月17日）山田新一（4月17日）、三木弘（4月19日）らが掲載された。
- 45 「輝く日本博見物記（7）—朝鮮館に光る異彩“八景八勝”」『大阪毎日新聞（朝鮮版）』1936年、4月20日付。場内には朝鮮八景八勝のジオラマが設置されていたという。「輝く日本博の漫画ニュース」『大阪毎日新聞（朝鮮版）』1936年4月29日付では「場内に一歩足を入れれば見事なジオラマで実に朝鮮旅行をしたと同じ気分だ。金剛山の絶景にみとれている親父と子供、子供は目の前にある不思議な形をした置物にビックリ仰天、「これなにや、これなにや」と親父に聞けば親父うはのそらで「金剛山のええ景色や」と答えている」という記事が見られる。
- 46 喜多、前掲論文、p. 64.
- 47 加藤は天草神來が金剛山に行くのを面倒がった割には、金剛山の絵をたくさん残しているということについて言及している。加藤松林人『回想の半島画壇』pp. 51-52.
- 48 加藤『回想の半島画壇』参照。

図版リスト

- (1) 『金剛山探勝案内』
- (2) 松本武正
- (3) 『京城雑筆』
- (4) 『大阪毎日新聞』1931年1月31日付

- (5) 加藤松林人「智異山と朱乙」記事
- (6) 加藤松林人〈智異山碧松寺〉〈朱乙温泉〉
- (7) 朝鮮八景ゆかたデザイン (左は仏国寺、右は扶余)

参考文献

新聞

『大阪毎日新聞 (朝鮮版)』

『京城日報』

『毎日申報』

雑誌

『京城彙報』

『京城雜筆』

単行本

『朝鮮功労者銘鑑』民衆時論社、1935年

永楽町人『漢京一年』朝鮮新聞社、1918年

松本武正・加藤松林『金剛山探勝案内』亀屋商店、1926年

成田魯石『金剛句歌詩集』亀屋商店、1927年

論文

加藤松林人「小泉さんと私」『ボトナム』34(5)、1957年、p. 13.

川瀬千春「植民地期朝鮮における創作版画の展開(2)―京城における日本人の活動と「朝鮮創作版画会」の顛末―」『名古屋大学博物館報告』No.31、2016年

喜多恵美子「在朝鮮日本人画家加藤松林人の活動―自筆履歴書をめぐって―」

『大谷学報』97巻2号、2018年

米家泰作「昭和10年の朝鮮八景選定―コロニアル・ツーリズムの景観」金田章裕編『景観史と歴史地理学』吉川弘文館、2018年、pp. 266-297.

김현숙「근대기 혼성 문화공간으로서의 금강산과 금강산 그림」『温知論叢』第35輯、2013

이민희「일본어 잡지『경성잡필』로 본 식민 담론」『翰林日本学』Vol.29、2016

加藤松林人『回想の半島画壇』1952年

加藤松林人『履歴書』1979年

(大谷大学教授 韓国・朝鮮美術)

〈キーワード〉朝鮮八景、金剛山、『京城雜筆』

